

国立国語研究所学術情報リポジトリ

本号の読みどころ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1879

◇研究論文：岡田美穂・林田 実「日本語学習者による格助詞の混同－存在場所の『に』と範囲限定の『で』－」

本論は、存在場所を表す格助詞「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いる誤用（例：大学の中で友達がいます）に関する調査研究です。報告されていることは次の三つです。(1) 問題の誤用は「場所が対比されている」「数詞がある」などの環境で生じやすいことが観察される。(2) そこから「問題の誤用は存在場所の『に』と範囲限定の『で』との混同により生ずる」という仮説を立て、その仮説のもとで日本語学習者に対して穴埋めテスト形式の調査を行った。(3) 調査の結果、問題の誤用は「中級の下」の学習者に最も多く見られる（いわゆる「U字型発達」を示す）ことがわかった。

「に」と「で」の使い分けに関するある種の誤用が存在場所の「に」と範囲限定の「で」との混同により生ずるとの見方は、新鮮かつ興味深い見方であり、存在場所の「に」の習得がU字型発達を示すことの説明にも有効と思われます。今後は、存在場所の「に」と範囲限定の「で」を混同する具体的なメカニズムを明らかにすることが課題となるでしょう。
(井上 優)

◆研究論文：向山陽子「文法学習に関する信念・態度、学習ストラテジー、学習成果の関連－暗示的帰納的指導のコンテキストの中で－」

第二言語習得研究は、大きく二つに分けて考えられるとされています。一つは、言語の習得過程そのものに焦点を当てた研究、もう一つは、学習者や学習に関わる諸要因に焦点を当てた研究です。近年は後者、すなわち、個別性に注目が集まっています。この研究は、信念・態度、学習ストラテジーと指導方法との食い違いが、学習成果とどういう関係にあるかを明らかにしようとしています。

ただ、それらの因子の相関について若干気になることもあります。吉田寿夫『本当にわかりやすいすぐく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本』（北大路書房）の74ページを見ると、相関の強さについて、一般に、

$0.0 \leq |\gamma| \leq 0.2 \Rightarrow$ ほとんど相関なし

$0.2 < |\gamma| \leq 0.4 \Rightarrow$ 弱い相関あり

$0.4 < |\gamma| \leq 0.7 \Rightarrow$ 比較的強い相関あり

$0.7 < |\gamma| \leq 1.0 \Rightarrow$ 強い相関あり

などと表現されると書いてあります(γ は相関係数)。しかし、本論文では、相関係数が0.2以下のものも相関ありとして考察が進められています。数字を用いた研究では、有意差が

あるかどうかで天国と地獄のようになってしまっているような気がしてなりません。これは、日本語教育、いえ、あらゆる研究における今後の課題としていくべきことだと考えています。

それはともかく、本論文は、日本語教師それぞれの振り返りの参考とするのに十分価値ある研究だと思います。ぜひお読みください。(河野俊之)

◇報告：堀池晋平「学習者は『ね』の意味をどのようにとらえているかー『ね』の自然さに関する評定調査に基づく考察ー」

本論は、終助詞「ね」の使い方を日本語学習者がどのように認識しているかを、「学習レベル」「発話場面」「他の文末形式との使い分け」という三つの観点から、詳細に調査したものです。調査の結果として、学習レベルが進むほど母語話者の使用状況に近づくということが報告されています。終助詞(文末詞)や感動詞(間投詞)は、使い方を誤るとコミュニケーション上重大な支障が生ずる可能性が高いものであり、日本語教育において特に重要な項目の一つですが、教育場面での具体的な取り扱いについてはいまだ不十分な点が多くあります。本論は、そのような状況を改善するための基礎研究として位置づけられるものであり、調査対象とする学習者の数が少ないという問題は残しつつも、今後の議論の叩き台として重要な意味を持つものです。今後は、より多くの学習者を対象とした調査、あるいは、より細かい状況設定のもとでの調査が行われることが期待されます。また、「ね」以外の文末形式についても、同様の方法で調査が蓄積されることが期待されます。

(井上 優)